

新刊
紹介

For some in ancient books
delight; Others prefer what mod-
erns write: Now I should be
extremely loth. Not to be thought
expert in both.

河野仁昭著

『新島襄への旅』

(京都新聞社・発行一九九三年二月)
B6判・三六五頁 一、八〇〇円)

本書は新島襄の生誕一五〇年を記念して出版された第一弾である。著者はながらく同志社の社史資料室長として『同志社百年史』や『新島襄全集』刊行の中心的な役割をはたしてきた人であり、この『新島襄への旅』という象徴的なタイトルには著者の詩人らしい感性がにじみ出ている。本書は厳密な意味での伝記ではないが、新島の人間性に限りなく迫ろうとする試みであり、その上、旅の人であった新島を求めて、国内各地(玉島、高梁、下北半島の風間浦、

函館、会津若松、山形県の白布高湯、伊香保、大磯)はもちろんのこと、米国のニューヨーク・イングリランドにまで、調査の範囲を広げている。本書からは新島の息遣いのようなものが感じられる。

新島の伝記ではないが、本書の章立ては基本的に伝記を背景としたものとなっているので、読者はあたかも伝記を読んでいるかのように感じるであろう。ここには従来の新島伝の著者たちが知らなかった伝記上の新事実が次から次へと紹介されていく。それというのも、新島の足跡をここまで広く辿った点で河野氏はあきらかに第一人者であり、その実地調査の徹底ぶりには驚嘆する。新島に関する文献が頭にはいつていればこそ、実地調査が生きてくる。加えてこの著者の場合には、詩人の眼と、詩人の読みと、詩人の表現力が働く。

河野氏は柏木義円、堀貞一、波多野培根といった諸先輩によって形成されてきた新島像に対して、もっと人間味のあるふれた、近付きやすい新島像を探求している。新島の偶像化を打破しようとする意欲が、たとえば「新島を困らせた学生たち」という章

などにあらわれている。また「徳富蘆花の恋」というすぐれた論文は、学生の恋愛問題に直面したときの新島校長の限界性といったものを微妙に表現している。本書は新島の食生活が洋食であったことを実証したはじめての書である。さらに同志社英学校設立にあたって山本覚馬のはたした役割について、ユニークな解釈を提示している。

つまり、同志社は四面楚歌の中に誕生したのではなく、「京都府が誘致した学校」という一面があるというのである。著者はこの興味深い見解を、数多くの資料を駆使して実証してみせる。

本書は新島研究の立場からみて、最近の一大収穫といえるべきである。同志社の一人でも多くの教職員、学生諸君に読んでほしい書である。

北垣宗治 敬和学園大学学長

岩山太次郎・別府恵子編

『川のアメリカ文学』

(南雲堂・発行一九九二年七月)
A5判・二二六頁 三、〇〇〇円)

アメリカ文化は、内陸奥深く大河に沿って展開しているから、植民時代の初期の日

記、旅行記などは「川」の文学である。この伝統がアメリカ文学に脈々と流れていることは当然であり、この点この『川のアメリカ文学』の企画着眼には敬意を表したい。それにしても、どういふわけかこの種の研究はいまのところ皆無に等しいのは不思議なことだ。「川」といつても、日本の「川」とアメリカの「川」から受ける印象やイメージ、それが文化に与える影響が全く異なるのだから、その辺の際立ちを期待したのだが、これはちょっと過大な望みであったようだ。

どんな場合でもそうだけれど、一つのテーマで多数者が論ずる場合、そういう求心性が生まれるのは特に論文となればこれは期待する方が無理というものだ。だから、印象深かった論文を取りあげて紹介せざる得ないということになる。

「川と楽園」(松山)が、「澱んだ川」と「流れる川」からなる「川」を「天の地の和解」の働きをするものとしてとらえ、その延長線上に究極の美を創造する、というポーの芸術論は明解である。だが、自然対芸術という図式で考えるところというポーの考え方と

いうのはアメリカ文学の中では特異なものではないか。

それにしても、大多数の論文がこのように「川」のもつ二面性(別府)を軸として論を展開しているのは興味深い。例えば、「帰還」と「流出」(青山)という視点からのアメリカ・ローマン主義の解釈「川上り」と

「川下り」の観点から「ミシシッピ川を座軸(那須)に据えたマーク・トウェイン解釈、「生と死の両義性」(森岡)によるヘミングウェイ論、これらには基本的には共通の視座が見える。「生と死の両義性」はディッキーの『救出』論(伊藤)にもあてはまる。「川下り」に展開される「自然の持つ荒野性」には慄然とさせられるものがあるが、これがアメリカ文化の中の伝統的な観方ではないか。ポー、マーク・トウェイン、ヘミングウェイ、ディッキーの作品の中では「川」が重要なメタフォアとなっているものが多いが、この点から大きな示唆を与えてくれるのは「逍遙する想像力」(林)である。「牧歌的風景」と異質の「ピクチャレスク」というアメリカ的概念は、「不均衡と予測」の難かしさをもつハドソン川を基調と

するものであることは一般に知られているところであるが、この種の風景描写(細部のディテールを見つめながら、自然の本質そのものを露わにしてゆくこの手法)によって、アメリカ文学は「新しい言を獲得した」という指摘には鋭いものがある。特に印象深かった論文である。

樋口秀雄(大学法学部教授)

森 章博著

『日本におけるジョン・デューイ思想研究の整理』

(秋桜社・発行一九九二年八月
A5判 四八三頁 五、〇〇〇円)

本書は、著者が第二次大戦直後、デューイの『民主主義と教育』にふれ、デューイ研究に着手して以来の研究業績を集大成したものである。

本書は三部だての構成であり、その第一部は、「日本におけるジョン・デューイ研究の歴史」に関する研究である。著者はデューイをもつて代表されるプラグマティズムの教育思想が、わが国にどのように導入され、展開されてきたかの解明に取りくんて

きた。そして大正、昭和、戦後（平成に至るまで）と時代別にそれぞれ、デューイ研究の足跡を綿密に調査することで、デューイ思想の受容過程および展開過程を明らかにしている。膨大な資料の収集とその内容分析によって明らかにされたこの研究は、極めて貴重なもので、デューイ研究者にとって有益な財産が供与されたように思える。

第二部は「ジョン・デューイ思想の発展に関する研究」であり、デューイ思想の形成史的研究といえる。著者はデューイの思想形成の過程をジョンズ・ホプキンス時代からコロンビア時代にかけて追求し、その間のデューイの論文、著書を分析し、思想的発展の過程を明らかにしている。この研究にも多くの資料が駆使されており、その研究成果は、高く評価されている。

第三部は「ジョン・デューイの形而上学に関する研究」である。これは著者が学生時代から取りこんできた研究テーマであり、これに関する論文が収録されている。「デューイの形而上学」というテーマをもって著者は、自然主義の立場にたつデューイの宗教観に言及し、その宗教観から新たな形而

上學解釈を展開している。

「デューイ思想の受容と展開過程の研究」「デューイ思想の形成史的研究」「デューイの形而上学に関する研究」からなる本書は、若いデューイ学徒に研究上有益な示唆を与えらると思う。同志社関係者のデューイ研究は、元良勇次郎、中島力造にはじまり吉川哲太郎から著者へと継承されている。本書にはデューイ文庫が設けられており、若いデューイ学徒の中で、三名が日本デューイ学会から研究奨励賞を受賞している。本書は、こうした若き学徒の研究を大いに刺激するものであり、また研究上の新たな課題を与えている。

佐野安仁（大学文学部教授）

佐野安仁・林 泰成著

『教科教育と人間形成』

— 地理歴史科・公民科の基底 —

（晃洋書房・発行一九九二年十一月）
A5判・一五二頁 一、七〇〇円

今般の学習指導要領の改訂にとまらぬ、高等学校の社会科が地理歴史科と公民科に分かれることになった。これに対しては、

社会科の理念を解体するものとして、一部に批判があり、事実、教育課程審議会においても十分な審議がなされぬまま決定されたという経緯がある。この点で、地理歴史科と公民科の教科教育論の構築は今後の課題である。

本書は以上の課題に応えようとする意欲的試みであつて、地理歴史科と公民科の教育課程上の理論的基底を体系的に究明するとともに、教科教育に関する諸問題、つまり教科の目標、教科内容の選択、方法、評価などにも十分目配りしたものとなつている。全体の構成は、まず教育課程編成上の理念を明らかにし、次いでその理念に基づいて地理歴史科、公民科それぞれの目標、内容、方法、評価を分析し、最後に教科教育の人間形成との結びつき、つまり教科教育と道徳教育の関わりを検討している。この構成は教育学的に穏当なものである。

本書の特質として最初に指摘できるのは、著者たちが基本的に「学問中心的教育課程〔discipline-centered curriculum〕」を教育課程編成上の基本的理念としてしていることである。それは著者達がフェニックス、ピ

ーターズ、ハーストなどのリベラル・エデュケーションを提唱する教育哲学者に関心を寄せていることから理解できるが、本書では特にフェニックスの理論に足場を置いている。フェニックスは意味論的分析によって六つの意味の領域を導出し、各々の領域における意味の成長を教育目的として規定する。著者達の意図は地理歴史科と公民科を意味の諸領域のなかに体系的に定位し、さらに他の意味の諸世界との関連を明らかにすることによって、教育課程の統合性を追究することであろう。

さらに本書では教科教育と道德教育の関連についても一定の見解が示されている。

各教科は独自の目標を持ちながら、道德教育的機能をも持つべきことは当然であるがこの課題を果たすことは難しい。本書では教育課程を顕在的なもの、副次的なもの、潜在的なもの、三つから成る重層的なもの、と捉え、それらの相互関係の分析によって、当該の課題に答えようとする。これはユニークな試みである。以上のように本書はコンサイスながら、明確な主張をもった好著と言えよう。 加賀裕郎(女子大学助教)

玉村文郎編

『日本語学を学ぶ人のために』

(世界思想社・発行一九九二年十月
B6判・三二二頁 一、九五〇円)

本書は、日本語の研究の前提、基礎とし、日本語教育をその応用として位置づけたいうえて、両者の関連づけをねらって編集された概説的入門書である。

書名が示す通り、基礎編の日本語学が全体の約七割を占め、各研究分野の専門家が執筆している。そのうち文法と語彙に約半分を費やして、精緻に解説してある。

語彙論は編者・玉村文郎の専門領域である。著書『語彙の研究と教育(上・下)』で詳述した内容が、分野ごとに適材を配して包括的に手際よく解説されている。「語義」(玉村文郎)では前著で設問とした事項が解説に繰り込まれており、膨大な語彙に対する編者の幅広く綿密な分析確認作業が裏付けとしてあって、それが湧いて出てくるといった趣が感じられる。

文法の章の「構文」(佐治圭三)は、文の成分論と、「は」と「が」を中心とする文の

主題をめぐる問題について、「ヴォイス・アスペクト・テンス」(仁田義雄)は、言表事態に属する文法カテゴリーとしての表題の項目について、いずれも執筆者の立場から記述され、熟練した解説で問題点が浮き彫りにされている。

「待遇表現」(窪田富男)は、このテーマに最適の執筆者を得て、従来の概説的入門書には見られない、内外の新旧の理論を踏まえた興味をそそる解説である。特に「聞き手の心理への介入度」は、生きたコミュニケーションの達成のために十分に理解しておくべき問題であり、簡潔、的確に説明してある。

応用編の日本語教育の中では、特に「文法・文型の教育」(大倉美和子)が、日本語の緻密な基礎研究に裏付けられた日本語教育を長年実践してきた執筆者にして可能な、短くはあるが適切な解説となっている。

「日本語教育の歴史」(山口幸二)は学習者を主体とする「外国語としての日本語教育」を視点として「国際化」を展望する執筆者の年来の立場を底流として書かれている。

各章・節の終わりに「研究課題」が付け
てあり、参考文献と併読して発展的に学ぶ
ことができるようにとの配慮がある。

最後に、研究と教育とが分業化している
現状では無理な注文かもしれないが、各分
野について同じ執筆者が、基礎としての日
本語を記述し、教育面での応用を論じると
いう構成だったら、両者をより有機的に関
連づけ得ただろうと思う。

小矢野哲夫（大阪外国語大学助教授）

江上波夫著

『江上波夫の日本古代史』騎馬 民族説四十五年』

（大巧社・発行一九九二年十一月）
（四六判・三八四頁 二二、五〇〇円）

本書は、江上波夫先生の文化勲章受章を
記念して出版されたものである。騎馬民族
説が発表されて、四十五年が経過し、時に
強い反論もみられる今日、受章とともに本
書が出版されたことの重要性はいうまでも
ないと思う。本書の解説を担当した文学部
の森浩一教授は「今回の受章で、政府がそ
の説を認めたかどうかはともかく、少なく

とも学問的業績は認めただな」と述べて
おられるのが、私もまったく同感である。

本書は、序章と七章から成っている。序
章では主に天皇家の本源が中国の東北地区
や朝鮮半島にあるとしたこの壮大な「騎馬
民族征服王朝説」の仮説の熟成する過程を
記している。そしてこの学説は、発表され
ると同時に世間の耳目を聳動させたのであ
る。

第一章の「日本民族」文化の源流と日本
国家の形成」においては、当時としては珍
しい座談会の形で民族学・考古学・東洋学
のさまざまな角度から日本の古代史を検討
するという学際協力の成果をみることで
きる。

第二章では、「水稻農業」で日本民族の形
成を、「騎馬民族」で日本国家の起源を説明
された。大陸の側から、日本と当時の東ア
ジアの形勢、朝鮮・日本の関係などを中心
として総合的に語られている。これは江上
先生の学問の特長の一つである。

第三章では主に「倭人の国から大和朝廷
へ」という発展の軌跡を探索されている。

第四章の「日本古代の騎馬民族国家」の

中で、日本だけではなく、中央アジアから
東北アジアにわたる広い視野から日本の古
墳時代を分析されているのは、江上先生の
学問の特長が最もよく現われているところ
である。

第五章の「騎馬民族説は実証された」に
おいては、新しく発見されている考古学資
料によって、この学説はほぼ完全に実証さ
れたと江上先生は語られている。後期古墳
から馬具が数多く出土しているという一点
を考えてもすくなくとも騎馬民族文化が日
本の文化に大きな影響を与えたことは、ま
ず、間違いないだろうと、私も思っている。
第六章には「世界史上における遊牧騎馬
民族の役割」が述べられている。アジアに
とどまらず、世界的な視野で、日本を見て
いるということが、この学説の大きな魅力
となっている。

第七章の「対談」は、アジア各地域の最
近の考古学の成果をとり入れた内容で、最
後をしめくくるのにふさわしい。江上先生
と森先生の対談を通じて、この本の内容が
非常にわかりやすく語られている。

この本は日本古代文化を研究する人々や、

古代史に興味をもつ人々にとつては、基本的な書物となる。

王維坤(中国西北大学副教授、同志社大学客員
研究員)

三塚武男著

『住民自治と地域福祉』

(法律文化社・発行一九九二年八月
B6判・二〇八頁・二、〇六〇円)

本書は、二十一世紀に向かって、住民が主人公となって切り拓いていく地域福祉活動の課題と基本的な方向、展望を明らかにする。ために、社会科学的な社会福祉研究の方法にもとづいて正面から展開された最新の成果である。地域福祉については各論福祉を組み替える総論としての理論研究が立ち遅れていた分野だけに待望の書物である。

本書全体に貫かれる傑出した特徴は、「実証的・科学的な政策批判を通じて、実践・運動と、その拠りどころになる組織づくりの具体的な指針を提示する」という視点からの分析である。厚生省・全社協の「在宅福祉」政策の矛盾をくらしの現場で正確に

とらえ、そこからまさに地域福祉として切り返していく活動の条件や展望が縦横に描かれている内容を読むと、政策批判の不可欠な意義と地域福祉の課題や実践・運動論を導き出す研究方法論の確かさを思い知らされるところである。

なかでも第三章「地域福祉の推進計画と活動指針」は本書のエッセンスが集約されており、地域福祉における「在宅福祉サービス」の位置づけや各種活動の担い手の役割に関する明解な分析は、社会福祉の事業的側面と運動的側面を統一的に発展させる地域福祉活動の組織論を大きく前進させるものである。

他の章は、著者が深くかかわっている研究運動である地域研(地域福祉問題研究全国交流集会)で担当された講座等の蓄積が活かされており、地域福祉活動のすすめ方、その課題をつかむ調査活動の意義や具体的な手法、政策の矛盾が集中している市区町村社会福祉協議会の職員論など、現場が直面している問題に対して実際に役立つ内容が豊富に盛り込まれている。住民自治の基盤となる「くらしを支える条件」づくりが

地域福祉活動の要であるとの洞察をはじめ、随所に創造的な理論化の到達点が示されているし、同時に、現場の実践や学習・研究活動に精力的に貢献しながら常にそこから学ぶ姿勢を堅持されている著者ならではの持ち味が「くらしのコトバ」での語り口調とともに発揮されている。

各々の構成部分が相互に関連づけられて読者の理解を深めさせているのは、社会福祉の対象課題と生活問題対策の体系上に占める位置づけをふまえ、保健・医療など隣接領域との関連性も捉える枠組みがあつてこそといえよう。社会福祉のみならず関連分野から地域福祉にかかわらざるをえない立場にある実践家にもぜひ推薦したい書物である。

林 博幸(華頂短期大学助教授)